

【ごーや】

「ごーやって、食べたことがありますか」

懐爺がききました。

気分上々のぼくは、

「おきなわのたべものじゃろ。かんちゃんのうちで、いちどくったが、にがくてかなわん。まるんで、たべもののおぼけじゃ」

正直にこたえました。

「【ごーや】は、荔枝（れいし）とも苦瓜（にがうり）ともいいます。ほんらい果物なのですが、果物村から村八分になって、しかたなく野菜村にやってきたんです。村八分になったら、人間でもおぼけになりますからね。いわんや植物をや」

「やっぱしのう。あれがおぼけでのうたら、せっかくのおぼけが、おぼけでのうなる」

「けれども、【ごーや】が大好きな人もいます」

「わしも、おぼけとしたり、すきになったぞい」

「それは良かったです」

「して、かいじいは、なんで【ごーや】のはなし、したんかのう」

「それがその」

懐爺は変な笑い方をしました。

「はやくいえ。わしはきがみじかい」

「わかっています。じつは、この村では、【ごーや】なるものを生産しております。それを沖縄旅行から帰った村長さんが、【ごーや】を栽培して、村の活性化の一助にしよう」と

村長が沖縄に行った話など、きいてはいない。

どうもこのごろ、なぜだか懐爺は嘘をつく。

「かっせいかたあ、なんじゃ」

「まあ、村を元気にしよう」と

「にがくてかなわんもので、げんきがでるんかのう」

「村で多量に生産して、町に売ろうということです」

「なるほどのう。おぼけで、もうけしごとかい」

「それが、儲かるどころか、気候の問題でしょうか、【ごーや】は育たずに、腐ってしまいました」

「くされの、おぼけでは、だれもちかよらんのう」

「ですから、金ちゃんよろしく」

「わしが、【ごーや】のしょぶん、するんか」

「まあ、おぼけですから、処分しなくとも、自然に消えてもえらえばいいので」

「なんか、【うらんだ一】のときににとるのう。かいじい、こんどはどこがいたいんじゃ」

「痛いところはないんですが、わたしは花粉症で鼻が利きません。臭いと感じないのに、消えろとはいえないでしょう」

それはそうですが、臭いと感じないのなら、近寄ることはできそうです。

ちなみに、この時代は「花粉症」なんて、だれもいっていません。

だれもいっていないことをいうんだから、懐爺はたとえおぼけでなくとも、人間でもなさそうです。

しかしぼくは、そんなことよりも、また自分が行くことになりそうだということに、こだわっていました。

「じゃがのう。にがくてくさい【ごーや】のおぼけなんぞに、あいたくないのう」

「そこはそれ」

「なんじゃそれ」

「金ちゃんのことですから」

「わしのことじゃから、たのまれりゃ、いやといえん」

「そういうことですね」

「わしのことじゃから、おぼけのこととなると、だまってはおれん」

「そういうことですね」

「だば、いってくるかいのう」

「いってらっしゃい」

ぼくがまだ動かないのに、懐爺は手を振った。

おぼけならなんでも会いたい、といっても、臭いおぼけは別というのが本音です。

ぼくがぐずぐずしていると、懐爺は洗濯ばさみをくれました。

それで鼻をつまんで、【ごーや】 畠に着くと、

「おーい、おぼけ【ごーや】、くさいから、きえろや」

大声でさげびました。

「臭いが悪いか」

むむむ、どこやらで、【ごーや】 がこたえました。

「わるうない。かいじいも、くさい。わしも、くさい」

「ならば、放っておいてくれ」

「そうはいかん。わしは、おぼけたいじの、せんもんかじゃ」

「そいつは、困った。ならば、交換条件でどうだ」

「あいよ」

「くさった、【ごーや】の仲間は、みんな消える。されど、まだくさってない、【ごーや】の仲間は、おまえさんが一人で、みんな食ってくれんか。食べ物を粗末にするのは、とても悪いことなんだから」

「あいよ」

ぼくが安請け合いをすると、くされ【ごーや】はぜんぶ消えて、まともな【ごーや】だけがのこりました。

まともな【ごーや】は「ごーやの歌」を歌っていました。

ごーやどやどやごーやどや
ごーやおいしやほうやれほ
ごーやたべればはるがくる
ごーやたべればなつがくる
ごーやたべればあきがくる
あきはしないがあきがくる
ごーやたべればふゆがくる

いつまでも歌っていそうで、らちがあきません。

ぼくはそれらをぜんぶ藁で縛って、担いで帰りました。

家で数えてみると百本もありました。

それからは、【ごーや】責め。

朝めしも【ごーや】、お弁当も【ごーや】、おやつも【ごーや】、晩めしも【ごーや】、夜食も【ごーや】。

夢のなかにも【ごーや】。

【ごーや】が、満足げに笑っていました。

さすがに、おぼけは、笑い方も薄気味悪くて、それはそれはなかなかのものでした。